

⑫ 実用新案公報 (Y 2) 昭 57-1828

⑮ Int.Cl.¹

識別記号

庁内整理番号

⑯ 公告 昭和 57 年 (1982) 1 月 12 日

A 47 G 33/02

6537-3 B

(全 3 頁)

1

2

⑰ 厨子

⑱ 実 願 昭 54-370

⑲ 出 願 昭 54 (1979) 1 月 9 日

公 開 昭 55-100587

⑳ 昭 55 (1980) 7 月 12 日

㉑ 考 案 者 銀治 祐一

高岡市長慶寺 575 番地 ワシアル
ミ株式会社内

㉒ 出 願 人 ワシアルミ株式会社

高岡市長慶寺 575 番地

㉓ 代 理 人 弁理士 佐藤 正年 外 1 名

㉔ 参考文献

実 開 昭 51-96600 (JP, U)

実 開 昭 47-9798 (JP, U)

㉕ 実用新案登録請求の範囲

(a) ① 基台となる底座;

② 底座上に載設され仏像等を載置する台座;

③ 仏像等の背面を囲み底座上に立設され、扉体 20
と共に筒体を形成する囲壁体;

④ 仏像等の正面を囲み囲壁体と共に筒体を形成
し、それぞれ囲壁体側縁との隣接部を軸として回
動可能な 2 個の扉体;

⑤ 前記筒体の上部を覆う頂体; 及び

⑥ 頂体の下部に接して設けられる装飾体;
よりなり;

(b) 囲壁体の上下縁には内方に向けて直角に張
出している帯状の張出部が設けられ;

(c) 底座及び頂体には、これらに接する囲壁体の 30
外側縁を囲む凸条が設けられ;

(d) 台座及び装飾体は筒体に内接する周縁形状
を有し、;

(e) 扉体の囲壁体と隣接する側縁両端には軸部
材が設けられ、該軸部材が底座及び頂体に設けら 35
れた軸受部に嵌合され;

(f) 囲壁体が底座及び頂体の凸条内に嵌合せし

められ、その張出部が互にビス結合される底座と
台座及び頂体と装飾体の周縁部の間に挟まれて、
底座、台座、囲壁体、扉体、装飾体及び頂体が一体に
固定され;

5 てなる厨子。

考案の詳細な説明

この考案は仏像等を納める厨子に係るものであ
る。

仏像等を納める厨子は古くより各種のものが知
10 られている。また厨子は一般に各部材毎に細かい
彫刻が施され、これらの部材を組合せて形成され
ている。これらの細かい彫刻が施された部材を接
着、ビス止等により接合するにしても、接合個所が
15 は簡単に実施することができないのが現状であつ
た。

この考案の目的は、厨子が細工容易な部材に分
割され、しかもそれらの部材を組合せて厨子とす
ることが簡単な厨子を提供するにある。

この考案による厨子は次の 6 種の部材にて構成
される。

① 基台となる底座。

② 底座上に載設され仏像等を載置する台座。

③ 仏像等の背面を囲み底座上に立設され、扉体 25
と共に筒体を形成する囲壁体。

④ 仏像等の正面を囲み囲壁体と共に筒体を形成
し、それぞれ囲壁体側縁との隣接部を軸として回
動可能な 2 個の扉体。

⑤ 前記筒体の上部を覆う頂体。

⑥ 頂体の下部に接して設けられる装飾体。

この考案による厨子の各部材は次の如く加工さ
れてある。

① 囲壁体の上下縁には内方に向けて直角に張出
している帯状の張出部が設けられてある。

② 底座及び頂体には、これらに接する囲壁体の
外側縁を囲む凸条が設けられてある。

③ 台座及び装飾体は筒体に内接する周縁形状を

3

4

有する。

④ 扉体の囲壁体と隣接する側縁両端に軸部材が、底座及び頂体に軸受部が設けられてある。

⑤ 底座と台座及び頂体と装飾体は互にビス結合することができる手段が設けられてある。

しかしてこの考案による厨子は、扉体の軸部材を底座及び頂体に設けられた軸受部に嵌合し、囲壁体を底座及び頂体の凸条内に嵌合し、その張出部を底座と台座及び頂体と装飾体の周縁部の間に挟んで、底座と台座及び頂体と装飾体をビス結合して、底座、台座、囲壁体、扉体、装飾体及び頂体を一体に固定して形成される。

以下この考案の厨子を実施例の図面に基いて詳述する。第1図a、b及び第2図はこの考案による厨子の一実施例を示すものである。第1図は正面図でaは扉体を閉鎖した状態を、bは扉体を開放した状態を示す。第2図は第1図aにおけるA-A矢視断面図である。

この考案による厨子は基台となる底座1、底座1上に載設され仏像等を載置する台座2、仏像等の背面を囲み底座上に立設される囲壁体3、仏像等の正面を囲む2個の扉体4a、4b、囲壁体3及び扉体4a、4bの上部を覆う頂体6、並びに頂体6の下部に接して設けられる装飾体5により構成されている。囲壁体3及び扉体4a、4bにより筒体

が形成される。囲壁体3の上下縁には内方に向けて直角に張出ている幅の狭い帯状の張出部3aが設けられてある。

底座1及び頂体6にはこれらに接する囲壁体3の外側縁を囲む凸条1a及び6aが設けられてある。また台座2及び装飾体5は筒体に内接する周縁形状とされてある。

扉体4a、4bの囲壁体3と隣接する側縁両端には軸部材4cが設けられてある。また底座1及び頂体6には軸受部としての孔1b及び6bが穿設されてある。

底座1及び装飾体5にはそれぞれビス孔1c、5cが、これらのビス孔1c、5cに対応する台座2及び頂体6の位置にねじ孔2c、6cが穿設され、これらにビス7を嵌入し両者を締付け得るようにされてある。

扉体4a、4bの前端部には、一方に閉止杆8が回動自在に取付けられ、他方に該閉止杆に係脱せ

しめる係止杆9が取付けられてある。

この考案の厨子の各部材は以上の如く構成されている。次にこれら部材の組立要領について述べる。組立の順序は底座1又は頂体6のいずれを基としてもよいが、ビス止めの便の為には頂体6を基として、即ち厨子を逆に組立てるのが都合がよいので、これについて述べる。

先ず、頂体6の凸条6a内に囲壁体3を嵌合せしめ、装飾体5を囲壁体3の内側に挿入して頂体6と装飾体5の周縁部で上側の張出部3aを挟み、次いでビス孔5c、ねじ孔6cにビス7を挿入して締め、頂体6、囲壁体3、装飾体5を一体に固定する。

次に、頂体の孔6b、6bに扉体4a、4bの軸部材4c、4cを嵌入し、囲壁体3、扉体4a、4bにて筒体とし、筒体の他端に、囲壁体3が底座1の凸条1aに嵌合し、扉体4a、4bの軸部材4c、4cが底座1の孔1b、1bに嵌入するように、底座1を当接し、底座1を当接保持させるまゝ、扉体4a、4bを開き、台座2を囲壁体3の内側に挿入して底座1と台座2の周縁部で下側の張出部3aを挟み、ビス孔1c、ねじ孔2cにビス7を挿入して締め、囲壁体3、底座1、台座2を一体固定する。これにより扉体4a、4bも囲壁体3側縁との隣接部を軸として回動可能に固定され、底座1、台座2、囲壁体3、扉体4a、4b、装飾体5及び頂体6の全部材が一体に固定されて組立が終る。

この考案による厨子は以上の如く構成され、細工容易な部材に分割されているので、彫刻等の細工が容易である。またこの厨子を金属、合成樹脂で製作するときは各部材の型も容易に準備することができる。また張出部3aは幅狭の帯状にしてあるので、成形容易で材料費も低減できるし、単に頂体と装飾体、及び底座と台座に挟むだけでよいので組立容易である。更に厨子の組立ては、ビス2本で簡単に実施することができ、熟練工の必要がなく全くの素人でも可能である。また使用したビスの頭は人目につかぬところにあるので美観を損うことがない。従つてこの考案の厨子は実用的価値が大である。

図面の簡単な説明

図面はこの考案の厨子の一実施例を示すものである。第1図は正面図で、aは扉体を閉鎖した状態を、bは扉体を開放した状態を示す。第2図は第1

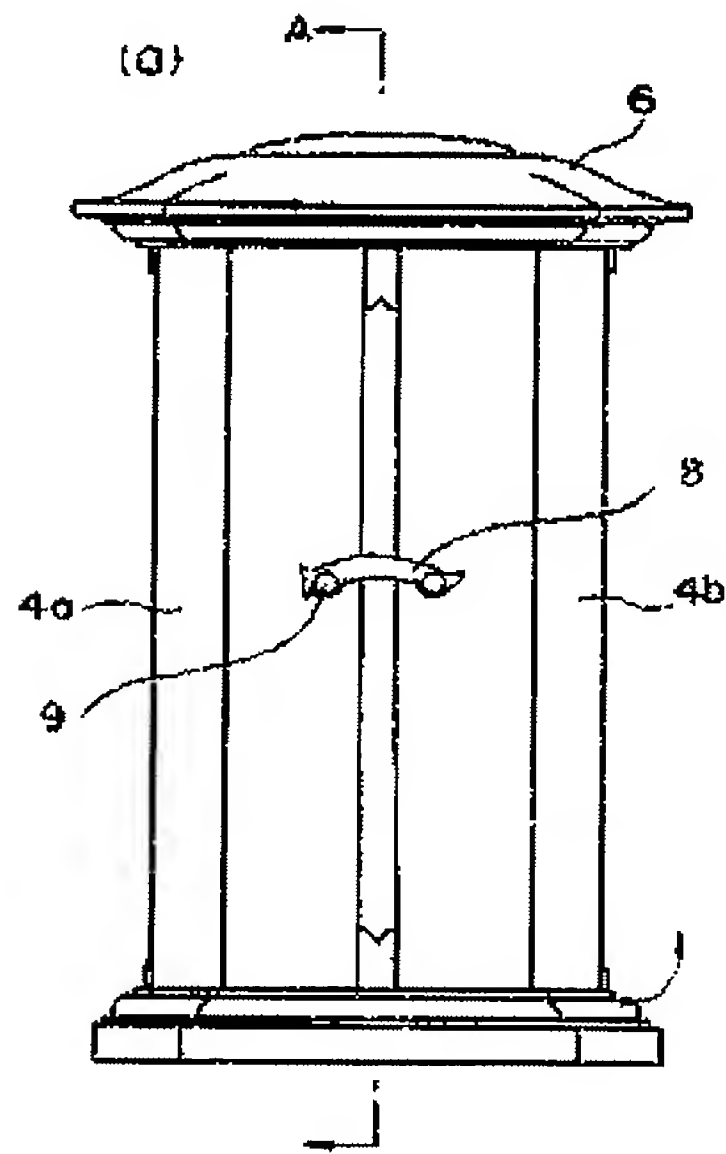
5

6

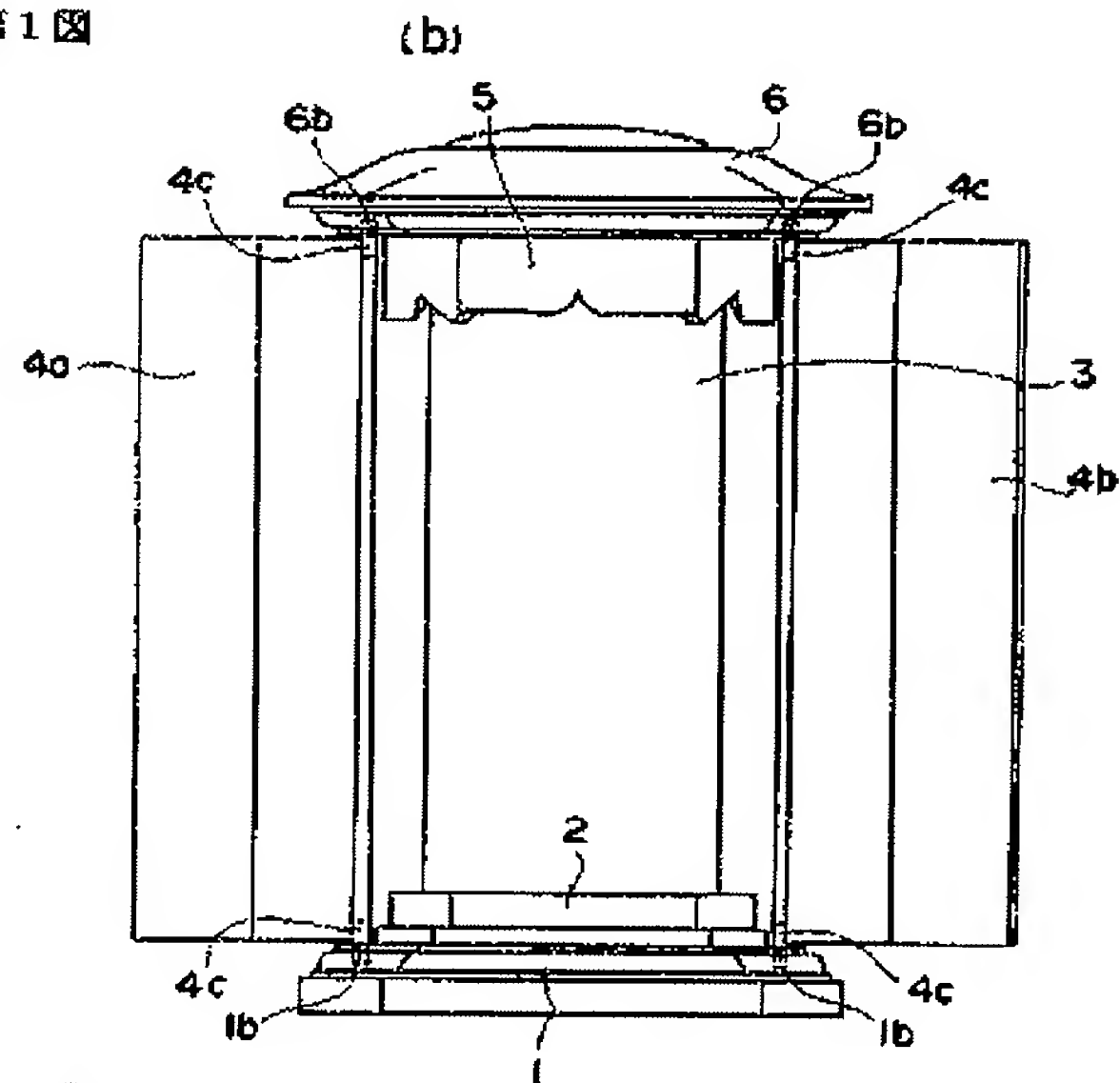
図 a における A—A 矢視断面図である。

図面において 1 は底座、2 は台座、3 は閉壁体、4 a, 4 b は扉体、5 は装飾体、6 は頂体、1 a, 6 a は

凸条、3 a は張出部、4 c は軸部材、1 b, 6 b は軸受部、7 はビスである。



第 1 図



第 2 図

